

哲学者・杉本耕一氏との対話

名 和 達 宣

意大学院耕道。今春、三十九歳の若さで急逝した、杉本耕一氏に付けられた法名である。

氏と最初に出会ったのは、今から約四年前の二〇一三年三月十三日、京都の相応学舎(1)においてである。同学舎の留守居役・平野喜之氏の導きにより、その場所での口頭発表と、氏との最初の対話の機会に恵まれた。その時に私が発表したのは、前年に暁烏敏賞(石川県白山市主催)へ出した論文をもとに、西田幾多郎と親鸞に通底する宗教観について考察したものできわめて拙い内容であったが、その十日後に氏から次のようなメールが届いた。

先日は教えられるところの多い発表をどうもありがとうございました。

西田と親鸞、西田と近代教学という課題は、二年ほど前にはじめて安田理深のものを読んで驚嘆して以来、ずっと関心をもっていました。

両者には本質的なところで非常に近いものがあると同時に、親鸞教学の思想の中には、西田の思想からは必ずしも出て来ないものもあるのではないかと思われ、もしかしたらそこに重要なものがあるかもしれないと考えています(前回「名号」の問題や「対応」の問題に関してややしつこく質問してしまいましたが、上のような関心から、非常に興味深い所です)。

添付しましたものは、現在計画中の本の「はじめに」「序」「目次」「おわりに」です。全部読んでいただくには及びませんが、もし何か気が付いたことなどありましたら、ご指導いただければ幸いです。（私の場合、いきなり宗教の問題に入ることとはためられますので、「歴史的世界」のあり方を分析してゆくと「宗教」の問題にいたらざるをえない、という方向を明らかにすることができればと考えています。）

（二〇一三年三月二十三日）

ここで「現在計画中の本」と言われるものは、同年の十二月に上梓された単著『西田哲学と歴史的世界——宗教の問いへ』（京都大学学術出版会）である。私のもとに送られたのは、本論を省いた片鱗であったが、それでも「学問としての「哲学」と、自分がどこで生きるかという切実な問題とが、常に一つであったところに西田の思索の独特の魅力がある」（序）と押さえつつ、その問題をどこまでも「哲学」に立脚して追究しようとする姿勢や、自己の内に生ずる「疑問」と向き合いつつ、どこまでもテキストを厳密に読んでいこうとする態度に、立場や境遇を越えて深く共鳴した。何よりも、はかることのできない「大きさ」のようなものを感じた。

その後、氏は愛媛大学に奉職され、私もまた東京の親鸞仏教センターへ三年の期限付きで赴任することとなった。それ以降、自身の担当する研究会に講師として招聘したり、各種学会で交流をしたり、はたまた共同研究の企画を構築したりと、私の東京での研究生生活は、常に氏との対話と共にあったと言っても過言ではない。

氏の訃報を受けたのは、二〇一六年四月二十五日の深夜十一時。愛媛大学で哲学を専攻する学生からのメールにより、その驚愕の事実を知った。この時、私は職場の親鸞仏教センター（当時）にて、追い込み状態となっていた『現

代と親鸞』第三十三号（「特集 清沢満之研究の軌跡と展望」、二〇一六年六月刊行）の編集作業に没頭していた。メールをじっくりと確認する余裕もないほどに、切羽詰まった慌ただしい状況であつたが、「お久しぶりです。詳細の分からぬ現時点でこれをお伝えすることが果たして良いのか、多くの葛藤がありますが、事実だけは早くお伝えしておかなければならないと思い、連絡させて頂きました。」という冒頭の文面が目に入り、ただ事ではないと作業の手を止めた。

——敬愛する杉本耕一先生がお亡くなりになりました。

この一文を、いったい何度読み返しただろうか。その後の連絡によると、前週の日曜日の講義を欠講して以来、週が明けても消息が不明であつたために同僚方が自宅を訪ねてみたところ、遺体で発見されたという。後日、致死性の不整脈を因として、四月二十一日に逝去していたことが判明した（私はその日の朝にもメールのやり取りをしていた）。

氏の葬儀は、故郷の名古屋市（港区）で五月四日に執り行われた。縁あつて、私はその場に参列させていただいた。葬儀は、氏の「家の宗教」である真宗大谷派の様式で勤められた。よくよく考えてみれば自然なことではあるが、生前の姿を想うと、なぜか不思議な感覚に身が包まれた。

葬儀を終えて数日後、私は氏の御母堂に手紙を送らせていただいた。文面のお大半は、私自身との交流の軌跡や哀悼の念をつづつた内容であつたが、それに加え、氏から預かっているいくつかの原稿について、その刊行にあつたことの承諾を請うた。実は、訃報を受けた時に編集していた論集（『現代と親鸞』第三十三号）に、氏の寄稿論文が掲載さ

れる予定であつたのである。

「西田幾多郎の『宗教哲学』と清沢満之の『宗教哲学』」と題されたその論文は、「遺作」と呼ぶのがはばかられるほどに、読む者に大いなる前途を予期させる内容である。私は訃報を受けて大いに動揺しながらも、氏の最後の完成論文を、何としても世に出さなければならぬと思つたのである。

そうして無事公表に至つた論文は、タイトルが示すとおり、西田と清沢の宗教哲学における「哲学」と「宗教」の重層的な関係を「動的に理解」しようと試みたものである。先にも述べたように、決して完結した内容ではなく、続編を期待せずにはいられない締めくくり方がなされている。特に終盤には、清沢の「哲学者」としての側面を発掘した今村仁司の研究に触れ、なかでも今村が清沢の宗教哲学における「哲学」と「宗教」との分限を明確にする論じ方、あるいは「哲学」によつて概念的に語りえないものを語るために「比喩」的語り（比説）を用いた点を評価していることを紹介したうえで、敢えて「哲学」と「宗教」とが重なるところを読み取つていくという、独自の読み方を提示している（その背景には「なぜ西田ではなく清沢なのか」という疑問があつたように思う）。

ちなみに、この論文のタイトルをめぐるのは、最終案に落ち着くまでに、氏と私との間で何度も意見交換を重ねている（最初に届いた案は「哲学」と「宗教」とをめぐる清沢満之と西田幾多郎であつた）。そのやり取りの最中に、氏から自らの展望を述べたメールが送られていたので、この場を借りて紹介させていただきたい。

タイトルにつきまして、今回の論文だけをとると、ご指摘のとおり、「清沢と西田における・・・」とした方が確かに分かりやすいとも思つたのですが、私の展望としては、京都学派・親鸞教学・禅思想を広く見渡しつつ「哲学」と「宗教」という問題がどうあつかわれているか（「哲学」と「宗教」という問題をめぐつて、さまざま

宗教思想家がどのような思想を展開しているか」という方向に展開させてゆきたいと考えています（いつかそういうテーマで一冊にまとめたいです）。ですので、できればそういう展望が示唆されるタイトルとして、「哲学」と「宗教」とをめぐる・・・」でいきたいと思っていますのですが、いかがでしょうか。

（二〇一六年二月十一日、傍線は本人による）

また、今村の清沢研究に関しては、このメールが届いた翌月（三月十七日）に、「清沢満之から問われるもの——異領域間の「対話」は可能か？」というテーマのもと開催した第二回「清沢満之研究交流会」（親鸞仏教センター主催）において、氏は「今村仁司の清沢満之論と「宗教哲学」の課題」という題目で、より具体的に、そしてより一層深く踏み込んで（特に今村の立場も単純に「哲学／宗教」の二元論では語れないという点について）研究発表をされた（二）。この会では、コメンテーターを務められた岩田文昭先生（大阪教育大学教授）より、「杉本氏は、宗教哲学における方法論を論じているため、かえって、それ以外の学問との間に壁を作る印象を受ける」との厳しい批判が投げかけられ、あるいは「その思想（概念・論理）だけでなく、物語としての人生や生き様をあわせてみていく必要がある」との提言がなされた。氏は当日の討議では、その批判を真摯に受け止めつつ、むしろ「壁」を「壁」と自覚するところから「対話」の可能性が開かれるのではないかと応答し、また翌日にお会いした際には、それでも自身の立場としては「あくまでも論理を抽出していく方法を取っていく」との抱負を述べ、さらには『宗教哲学骸骨』における「唯々無数の有限相寄りて始めて無限と同一体たるを得べきのみ」（第二章「有限無限」という一点で、清沢の思想はすべて読んでいくことができるはずだと、静かに、そして熱く語った。

ところで、冒頭で「東京での研究生生活は、常に氏との対話と共にあったと言つても過言ではない」と述べたが、大きく分けると、最初の二年は互いに共鳴するところを出し合つていたのに対し、最後の一年は特に氏の意向により、相反するところを敢えてぶつける方向に転向したように思う。とりわけ先に紹介した第二回「清沢満之研究交流会」の二日前には、かねてより意見交換をしていた「人格」と「悲哀」の問題をめぐつて、以下のような厳しい内容のメールが届いた。

今回の発表の中心的な問題では必ずしもないのですが、前から議論していた宗教における「人格」性に関して、今回の発表でも少し触れており、それについてもどこかでまた議論してみたいと思うので、少し書いてみます。

今村は「阿弥陀仏」を人格的なものとして表象してしまう「擬人法」的な態度を、「比喩」であるべきものを実体化してしまうものとして批判しています。私としては大きく共感するところで、「絶対」が人間に対して人格的に現れる（怒り、赦し、愛など）面をもつことを認めたとしても、やはり根柢には、人間的な臭みから離れたもの、人間が思い描くような「すばらしいもの」を絶したもの（法性法身）があるのだからならぬと考えます。そういうところで人間的なものが洗い落とされて初めて、絶対者の怒りとか愛ということが言えるのではないかと考えます。神の平等・無限の「愛」を人間的な差別・有限の「愛」から連続的に類推してしまうのは、誤解の元だと思っています。（中略）

上の観点から、私は西田の宗教哲学の根本概念としての「悲哀」を、多くの人にとってイメージしやすいという理由で、吾が子の死の「悲哀」に安易に結びつけてしまうことに反対です。吾が子の死を悲しむというのは、もちろん悲痛なものではあるのですが、多くの場合（西田がそうであったというのではないですが）、子供

を自分の所有物としてずつと手元に置いておきたいのにそれが叶えられないという、我欲・愛着にまわりつかれた感情のように思われます。そういう世間的な「悲哀」（自分の子が死ぬのは悲しいが、誰からも愛されていない人が独りでたれ死んでも全く心が動かない）で、宗教的なものにかかわる人間存在そのものの「悲哀」を喩えてしまうのは、混乱を招く要因になるのではないかと思います。「二人称の死」という視点は最近しばしばとりあげられ、私もなるほどと思わされる面はあるのですが、しかし、宗教の問題にかかわるレベルで純粹に「死」（自己の存在の底に潜む自己否定）の問題に向き合おうとするときに、世間的な人間関係との連続性を引き摺った「二人称の死」をもちこむと、むしろ混乱を招くのではないかと考えます。そこをしっかりと切らないと、この世における差別的な愛を宗教的な愛に持ち込み、不純にすることになってしまうでしょう。（中略）

長文失礼しました。前に名和さんから提示していただいた「人格」の問題はずつと気にかかっていたので、不十分ながら、前のご論文や最近話題にされているところに触れつつ、大雑把に思ったことを書いてみました。異論はありうるかもしれませんが、対立点が見えてくるというのは悪いことではないと思います。今回の交流会の中心テーマとはちがうかもしれませんが、またどこかで議論できればと思います。

（二〇一六年三月十五日）

氏が死した今、無念にもこれから先は、直接的に議論を交わすことはできない。しかし、投げかけられた問いや批判、遺された課題と向き合うなかで、氏との「対話」はますます展開されていくと確信している。最後に、西田が「場所的論理と宗教的世界観」の執筆中に出した書簡を敢えて、引くことにより、本稿を結ばせていただきたい。

弥生の死は誠に突然にて驚きました 近年は特に親切に孝行を尽しくれ懐しく思つてゐたのに 何とも云ひ様のない淋しさと悲哀に沈んでゐます 併し私はしつかりしています 自分でなければならぬ仕事を少しでも多くして後にのこして置きたいとおもひ居ります

(西田麻子宛書簡、一九四五年二月二十一日付)

注

(1) 真宗大谷派の教学者・安田理深(一九〇〇～一九八二)が京都市北区小山下総町に創設した学仏道場。

(2) この研究発表と討議の記録は『現代と親鸞』第三十五号(二〇一七年六月発行)にて報告予定。